

視点・論点・ところてん

「学校安心ルール」について考える②

広島で「内申書に非行歴があるから」という理由で高校の推薦入学をもらえなかった中学生が自殺するという痛ましい事件が起こった。おまけにその非行歴の記録は本人のものではなく、記録そのものが間違いであった。明らかに学校側の過失であるが、もっと許せないのは非行歴が一回でもあると、どれだけ更正しようとするのチャンスを与えないという学校のルールそのものだ。もう一つ言えば、その学校では1・2年生のときの非行歴は、カウントしない方針だったのに、管理職の鶴の一声で上記のルールに変えられた。おまけにこの事件のあと、こっそりルールを戻していたというから朝令暮改もいいところである。

話を大阪市教委の「学校安心ルール（個別指導教室）」に戻す。大阪市では生徒の問題行動をレベル1～5に分類し、指導する。広島の例と一緒にどんな理由があろうとルールに例外はない。それどころか、保護者にルールを示したプリントを配布し、監視役にさせて徹底的に守らせるつ

もりだ。

ずりと監視され問題行動を起こさない「いい子」を演じ続けようとする子どもたち。これがどれほど子どもたちのストレスになるか、想像に難くない。

■「ゼロ・トレランス」の指導の行き先

「ゼロ・トレランス」ということばがある。「寛容度ゼロ」と訳されるそうだが、1990年代、アメリカで銃乱射事件が多発したとき考案された。小さな問題もあいまいにせず、行動規範を子どもに示し、破ったらペナルティーを科す、そんな指導法のことだ。生活指導畑の先生の話によると、「学校のガラス1枚割れているのを放置したり、トイレの落書きひとつを放置すると、そこから学校が荒れだす。そうならないために小さな芽を一つずつ摘んでいく」のだそうだ。

さて、そのゼロトレランス方式の指導、問題行動の動機も背景も違う子どもたちに果たしてふさわしいのか、学校の事情もそれぞれであるのにマニュアル的に対応

するのは無理があるといわざるを得ない。

仮に、表面上は問題行動が減ったように見えても、子どもたちが見えにくいように問題行動の質を変化させているだけかもしれない。子どもたちの問題行動は、実に流動的に質的な変化を起こし、ルールの裏をかくように進むことがよくある。それに応じ、問題行動のルールだけを増やしていてもたちごっこであり、根本的な問題の解決にはならない。

■子どもたちに必要な指導

小さな問題行動も見逃さず、毅然とした態度でルールを守らせる「ゼロ・トレランス」の指導と反対の指導がある。それは多くの教員が日常努力している「一人ひとりに向き合う教育」である。子どもの行動の背景を探り、理由を共有する。中には「そんな理由で……」と首をかしげたくなるようなものもあるかもしれない。だが、子どものスタートラインはそこからだと思い、教員は子どもの目線に降りていく。スタートラインが「ゼロ」からだから、子どもが努力した分だけ「プラス評価」になる。時間をかけ、その努力した部分を共有する。

「時間に追われ、常に競争と背中合わせの子どもたちは、いろいろな苦労やストレスを背負って生きている」そういう理解を子どもたちに示すだけで、子どもは少しずつ心を開き、問題行動の核心をともに解決し

あう関係をめざせるのではないだろうか。

■やはり、同志会実践だ！

対個人へのアプローチだけでは少し足りない。文化的活動を通した集団の中に子どもが位置づかなければならない。理想的に言えば「主体者形成」なのだろうが、ここはスモールステップで、まずは集団の中で各々が活躍できる、つまり「わかり・できる」活動を保障することが必要になってくる。

「わかって・できる」といえば同志会実践だ。手前味噌ではあるが、過去の同志会実践には、荒れたクラスが立ち直ったり、とつても指導が難しかった子どもがスポーツ文化、運動文化に触れ変革していった報告がたくさんあるのだ。かの有名な「南中ソーラン」だって、荒れた学校が民舞の文化で立ち直ったよい例である。それをゼロトレランス方式で縛り続けていても、いい効果は得られにくかったと思う。

大阪市内の先生に聞くとこの「学校安心ルール(個別指導教室)」の取り組みはあまり進んでいないようである。きっと現場での混乱を考え、慎重に対応しているのであろう。「学校安心ルール」の問題点をしっかり理解し、そうでない指導をこれからも大切にしていきたいものである。

(文責:辻内)

